

男女混合名簿からみる中学生のジェンダー意識

伊 藤 倫 子

はじめに

2004年（平成16年）8月26日、東京都教育委員会は、「ジェンダーフリー思想に基づく男女混合名簿の禁止」を決定した。その理由を、「ジェンダーフリーは、男性、女性を否定し中性化を目指すといった誤った認識を広げているからである」と説明している。しかしながら、「男性・女性を否定する」ような影響力を男女混合名簿は有しているのだろうか。本研究では、この東京都の男女混合名簿に対する解釈を検証するために、実際に男女混合名簿はどのような影響力を持っているのかを追求していく。

第1章：男女混合名簿とは

1. 男女混合名簿

男女混合名簿が実際に使用され始めたのは、1983年のことだ。国立市の小学校教員が、男女別名簿を使用することによって、「常に男子は優先されるべき存在である」という意識を植え付けてしまうのではないかと懸念し、性別によらない名簿——男女混合名簿を実践したのである（渡辺，2003）。

だが、「名簿において男子が先の順序であることは、女子を差別することにはならない」という意見を軸に、男女混合名簿に反対の姿勢を示す者も少なくない。しかし、「女性差別撤廃条約」（1979年に国連総会で採択、1985年に日本批准）では、「性に基づく区別は女性差別である」と定義付けられている。つまり、性によって区別される「男女別名簿」は女性差別であると明言しているのだ。

そもそも、1985年に開催されたナイロビ会議での報告（インド、日本を除くすべての国が、男女混合名簿を使用していることが判明した）からも判断できるように、男女混合名簿を使用することは世界的にみても当然のことである。

2001年の男女混合名簿の実施率は、小学校全校で実施しているのが56.2%、中学校全

校で39.2%、高校全校では49.9%である（日教組女性部「『男女混合名簿』のとりくみについて」2001）。

2. ジェンダーフリーバッシング

(1) ジェンダーフリーバッシングとは

冒頭に述べたように2004年（平成16年）8月26日、東京都教育委員会はジェンダーフリー思想に基づく男女混合名簿の使用を禁じた。ちなみにこれは「ジェンダーフリー思想に基づく」と限定されているので、男女平等の思想から男女混合名簿を使用することは、禁止の対象にはならない。

何故、東京都はこのような決定を下したのだろうか。これを理解するためには、ジェンダーフリーバッシングについて触れる必要がある。ジェンダーフリーバッシングは、「ジェンダーフリー」を男性・女性のそれぞれの性による特性を無くし中性化を目指すことと捉え、それに対し反対の姿勢を表明しているものである。このとき挙げられるジェンダーフリーの事例は、「体育の時間などに男女一緒に更衣室で着替えさせられた」、「修学旅行時に男女同室で宿泊させられた」といったものだ。しかしながら、上記のジェンダーフリーの事例は全くの虚偽であることが判明している。『南日本新聞』の調べによると、これらの極端な事例は、中川八洋筑波大学教授の冊子『これがジェンダーフリーの正体だ、日本解体の「革命」が始まっている』（日本政策研究センター）を根拠としたものである。だがこの中川教授は、現場で事実確認もせず、高橋史朗明星大教授（教育学）に聞いたことを書いた、と語っているのである。またこの高橋教授（『新しい歴史教科書をつくる会』の主要メンバーであり、統一教会との関連も多く指摘されている）も、当該の学校に確認をしていないことが判明した。東京女性財団が出したジェンダーフリー教育のビデオから、これらの事例を発見したとしているが、このビデオを南日本新聞があらためたところ、問題の箇所は無かったと指摘している。つまり、これらの事例は信憑性が何一つ無い偽りであるということが、証明されたのである（浅井ら、2003）。このほか、学校における性教育に対しても、それがフリーセックスを助長する過激な思想などといった理由により、バッシングを受けている現実がある。

だが、一部のマスコミがジェンダーフリーバッシングの論拠の矛盾を証明しながらも、その他大勢のマスコミによって、ジェンダーフリーバッシングは続いている。この背景には一体何があるのだろうか。

(2) バッシングの背景と新保守主義のねらい

実はジェンダーフリーバッシングの背景には、この国の「新保守主義」が密接に関わっている。この新保守主義とは、70年代に高度成長時代の終焉とともに登場した思想である。これは、昨今のすべての危機はモラルの衰退が原因となっていると捉え、伝統的保守的価値観への回帰（女性は家庭に帰れ。父性の復権など）を主張している。その特徴的な活動は、戦後社会に定着した日本国憲法と、教育基本法の理念を柱とした政治的合意と福祉国家体制の解体をめざすとともに、軍事的には大国化路線をすすめるということがあげられる。

こうした新保守主義的理念にもとづいた国家再編の動きのなかで、日本におけるネオコン（「構造改革急進派」）が1993年の政界再編・連立政権を幹に、1995年以降急速に台頭してくることとなった。

これらは以下の3点を軸に置いている。

まず政治についてだが、戦後民主主義の平等の理念を、機会（チャンス）の平等ととらえ、結果の平等は政治の課題から遠ざけているという現状が存在する。

2つ目は、軍事面についてである。ジェンダーフリー・性教育バッシングを行っている者たちは、「新しい歴史教科書をつくる会」のメンバーでも多く、またイラク新法による「自衛隊」派遣や「日の丸・君が代」の強制などの動きに積極的に賛成している人々であることが明らかになっている。

3つ目は教育である。これは教育基本法「改正」と新しい学校経営（NPT New Public Management）をメインに、民間企業的な経営手法を大幅に取り入れた「新しい行政経営」といわれるものであり、学校分野で一般の会社組織のように上から徹底的に管理する方法をとろうとする考え方である。そして、この導入を軸に改編がすすめられている。

また全生徒に配布される『心のノート』中学生版の最後の項目では、「大切な家族の一員だから」「この学校が好き」「郷土をもっと好きになろう」「この国を愛し、この国に生きる」「世界に思いをはせよう」となっており、〈家族愛→学校愛→郷土愛→愛国心→国際貢献〉という図式を連想させ、子どもたちに愛国心を植え付けさせようとしている。また教育基本法「改正」では「21世紀を切り開く心豊かでたくましい日本人の育成」という教育目標を掲げ、愛国心教育を行なおうとしている。

上記の3つの軸にそって新保守主義的体制を整えるためには、「国民的意思統一」が必須条件となってくる。そして、それを実行させるのに必要となるのが男性中心の「男性優位主義」（強さ・リーダー性・献身主義）なのである。それゆえに、「個性を尊重していこうとする」正しい意味でのジェンダーフリー思想は、集団を管理していきたい新

保守主義者にとって、理想の妨げになるものでしかない。

石原慎太郎東京都知事も、しばしばこういった新保守主義的な言動をとっている。このため、2004年に決定された「ジェンダーフリー思想に基づく男女混合名簿の禁止」も、「ジェンダーフリーは中性化を目的としているから」という理由ではなく、新保守主義的な思想が決定に至ったと考えるのが自然であろう。

3. 各都道府県教育委員会の男女混合名簿に対する見解

ここまでは、東京都教育委員会の男女混合名簿に対する主張を中心に見てきた。しかしながら、この東京都の意見が一般的なものであると断じ難い。そこで他の各道府県における男女混合名簿に対する見解を調べてみた。

(1) 調査対象と方法

対象：東京都を除く、46道府県教育委員会

時期：2005年6月～10月

方法：各都道府県が運営するホームページ上からメール、又は郵送にて質問紙（4問）を送付し、メール・郵送・電話にて結果を受け取る。

(2) 調査結果

①各道府県内の男女混合名簿の普及度

まず、各道府県内の男女混合名簿の普及率について尋ねてみた。これは単に数値を比較するだけではなく、「各道府県は、男女混合名簿の実態をどの程度把握しているか」を認識することによって、「男女混合名簿に対する関心を量る」という狙いがある。しかしながら、回答の仕方を設定していなかったがために、答え方が統一されていない。そのため有効回答数にバラツキが生じてしまった（小学校・中学校・高等学校・幼稚園・養護学校の普及率の回答数が一定になっていない）。

そこで、今回はある程度の回答を得ることができた小学校・中学校・高校の普及率をみていくことにする。また、これらの学校は県立学校が対象となっており、私立の学校は含まれていないことを付け加えておく。

図1と図2を比較すると、全体的に小学校の普及率の方が、中学校よりも高くなっていることが分かる。70%以上の男女混合名簿普及率を保っている県は、小学校で20件、中学校では12件であった。

また、小学校・中学校共に普及率を回答した県（21件）は、必ず小学校の普及率が、

中学校の普及率よりも上回っていた（小学校の普及率と中学校の普及率が同じ＝5件、小学校の普及率の方が高い＝21件）。小学校で混合名簿の普及率が高く中学校で低いのは、学校による生徒への束縛度の違いによるのではないかと推測できる。中学校は、制服などが例に挙げられるように、統一化を強要される事柄が小学校よりも多い。一人ひとりの個性を尊重していく男女混合名簿は、この「統一化」された学校文化とは逆の価値観に支えられているものであるため、中学校は小学校よりも男女混合名簿の普及率が低いのではないかと考えられる。

では次に、高校の男女混合名簿の普及率を見ていくことにしよう。高校の普及率の回

図1 各道府県小学校における混合名簿普及率（26件）

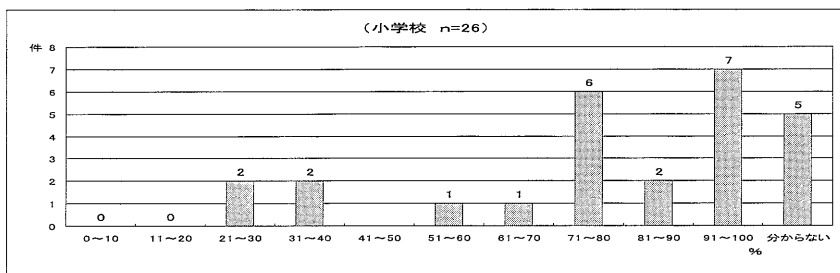


図2 各道府県中学校における混合名簿普及率（26件）

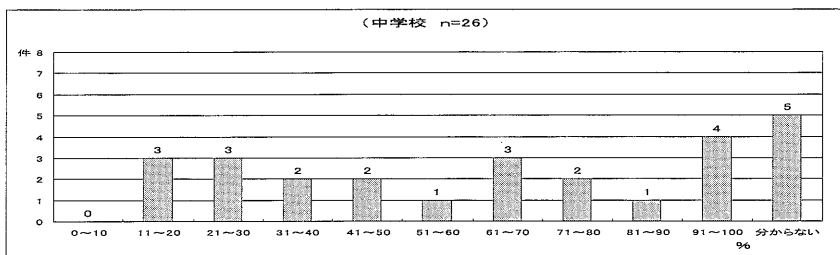
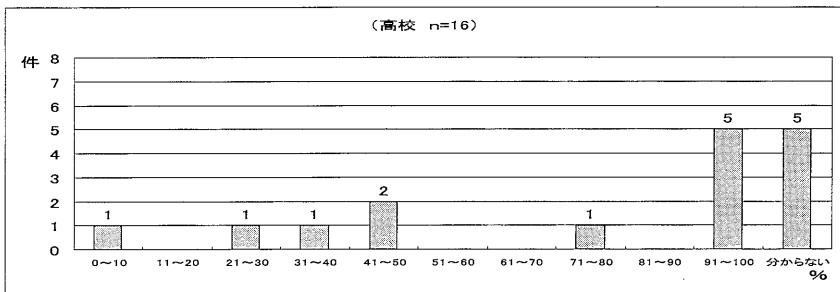


図3 各道府県高等学校における混合名簿普及率（16件）



答数は17件、その内有効回答数は16件となっている。回答数が小・中学校よりも少ないため、比較しにくいですが、図3から高校の男女混合名簿の普及率は、決して低いわけではないことが判断できる(70%以上の普及率を保っているのが11件)。小学校・中学校よりも普及率が高いのが5件、小学校の普及率よりは低いが中学校よりも高いのは3件、となっており、中学校の混合名簿の普及率よりも低くなっているのは、わずか1件だけである。

この結果から、各道府県において男女混合名簿の普及がしにくいのは、中学校であるということが明らかになった。また混合名簿の普及率を把握していない県が3件あったことから、「学校における出席簿は重要視するものではない」と捉えられているということも判断できる。

②男女混合名簿の使用に対する見解

次に、各道府県の男女混合名簿についての見解を尋ね、表1にその結果を掲げた。回答数は27件で、複数回答になっている。

表1 混合名簿使用に対する各道府県の見解 (27件)

学校(学校長)が判断する	15件
男女共同参画・男女平等のために使用	14件
見解なし	4件

学校(学校長)が判断するという見解を示した件のうち、体育の授業や身体測定、男女別集計が義務付けられている諸調査などの場合のときなど、男女別名簿の必要性を説き使い分けることが重要であるとしたのが4件、また、男女混合名簿の導入は誤ったジェンダーフリー教育に繋がり混乱が生じる可能性もあるため慎重になるべきである、と示唆したものが3件みられた。そこには男女混合名簿は悪影響の恐れがあるとしながらも、強硬に反対する姿勢は存在していない。

加えて、男女共同参画・男女平等のためにという項目は、回答数の約半数を占めていることから、男女混合名簿に賛成する姿勢が窺える。また、見解なしと回答している県は、特別に賛成も反対もしないということ示しているので、男女混合名簿を否定するつもりはないようだ。つまり、男女混合名簿に強い敵愾心を持っている東京都教育委員会の見解が、特殊なケースであると判断できる。

また③「東京都のジェンダーフリー思想に基づく男女混合名簿の禁止についての見解」や「ジェンダーフリー教育の見解」などについても尋ねたが、③は「他教育委員会に対するコメントはできない」、④「ジェンダーフリーは国が概念を決定していないので使

用していない」という回答がほとんどであったため、有効な結果を得ることはできなかった。

それでは、実際に学校生活を送っている当事者である生徒たちは、男女混合名簿や、男女別名簿について、どのように感じているのであろうか。また、名簿によるジェンダー意識への影響のようなものはあるのであろうか。次章では、生徒たちの意識調査結果をみていこう。

第2章：中学生に対する男女混合名簿に関する意識調査

1. 調査の対象と方法

(1) 調査対象

本研究で対象とするのは、中学校3年生の男女混合名簿を採用している生徒（男子254人、女子162人）と、その比較対象として女子のみの名簿のもとで生活する女子校の生徒272人である。平均年齢は、混合名簿の男子生徒が14.4歳、混合名簿の女子生徒が14.4歳、女子校の生徒が14.5歳である。

(2) 調査方法

2005年9月に、それぞれの学校において質問紙調査を実施。

(3) 調査目的

男女混合名簿は、新保守主義などといった本来の「男女平等」という目的から全く外れた要因により否定されている。これが真実であるかの議論はさておき、実際に男女混合名簿を使用しているのは、子どもたち自身である。「男女混合名簿は、使用者である子どもたちに悪影響（たとえば『中性化』など）を与えているのだろうか」ということを明らかにすることを目的とし、子どもたちの名簿意識やジェンダー意識を分析していく。

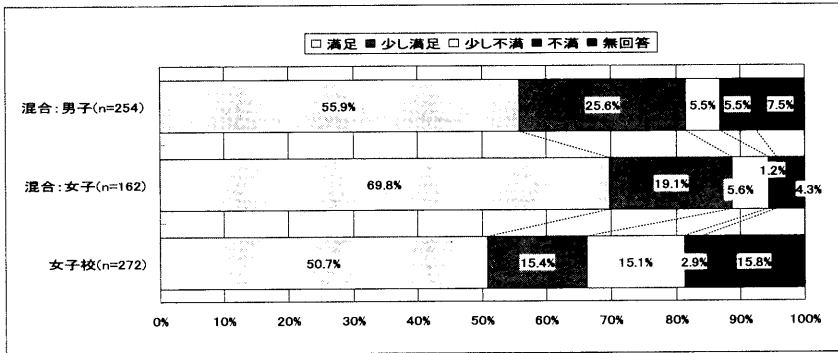
2. 結果

(1) 現在（中学校）の名簿の満足度

まずは現時点での出席簿の満足度をみていく。回答数（n）は、既述のように男女混合名簿の男子（以下、混合男子）254人、男女混合名簿の女子（以下、混合女子）162人、女子校の生徒272人である。

男女混合名簿を使用している混合男子で、現在の名簿に満足しているのが80.6%

図4 名簿形態別にみた現在（中学）の名簿満足度



〔満足〕55%、〔少し満足〕25.6%）、同じく混合名簿の混合女子は88.9%（〔満足〕69.8%、〔少し満足〕19.1%）である。そして女子だけの名簿を使用している女子校では、66.1%（〔満足〕50.7%、〔少し満足〕15.4%）が満足している（図4）。

現在の名簿に最も満足感を覚えているのは、混合女子である。次点は混合男子となっており、混合女子と8.3%の差が存在する。やや差があるといえるかもしれないが、女子校の割合と比較するとたいしたものではない。女子校の現在の名簿の満足度は、66.1%となっており、最も満足している混合女子とは22.8%の差があり、混合男子とでも14.5%の違いがある。

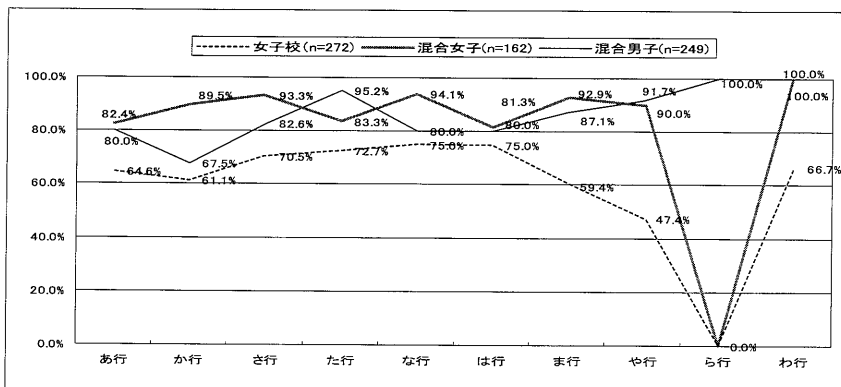
男女混合名簿と女子校の名簿の大きな違いは、異性の存在の有無である。やはり、その違いが名簿の満足度の違いになっているのではないだろうか。

(2) 苗字の順序による満足度

ここでは、苗字（姓）によって出席簿の順序が決定されることに、対象者が抵抗を感じているのか、ということ进行を明らかにする。回答数は、混合男子249人、混合女子162人、女子校の生徒268人で無回答を除いてある。図5は、「満足」と「少し満足」と回答した合計を表している。また、混合女子・女子校の「ら行」の満足度が0.0%になっているが、これは単に混合女子・女子校の対象者に「ら行」の名字の者が存在しなかっただけである。

図5を見ると、混合男子・混合女子の名字別満足度が、後の行にいくほど緩やかに高くなっていることが分かる。つまり混合名簿においては、「渡辺（わたなべ）」さんは、「相川（あいかわ）」さんといった自分より出席簿の順が早い人に対し、不満をもってい

図5 名簿形態別にみた苗字順名簿満足度

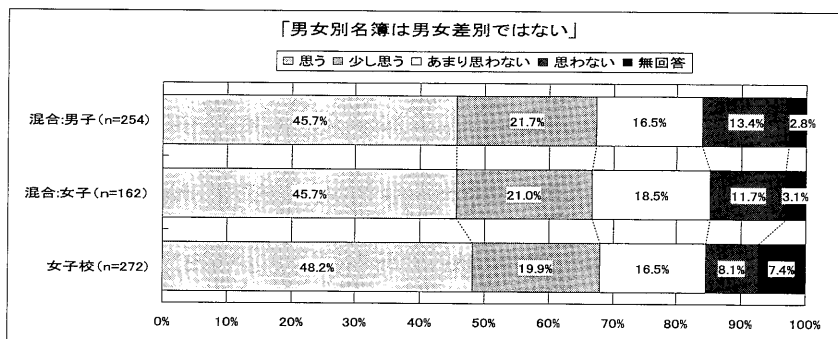


る様子はなく、むしろ後の順位であることに満足感を持っているようだ。ところが、女子校の苗字別満足度を見ると、混合男子・混合女子とは逆に満足度が低くなっていることが見てとれる。これも、混合名簿と女子だけの名簿の特性の違いによるものだろうか。

(3) 男女別名簿

男女混合名簿反対派は、「男女を区別する男女別名簿は差別ではない」という主張をしている。そこで、中学生の男女別名簿に対する見解を尋ねてみた。まずは、直接的に「男女別名簿は男女差別ではないと思うか。」という設問の結果をみていく。回答数は、男女混合名簿の男子（以下、混合男子）254人、男女混合名簿の女子（以下、混合女子）162人、女子校の生徒272人、である（図6）。

図6 名簿形態別にみた男女別名簿についての差別感



「男女別名簿は男女差別ではない」と考えている生徒の数は、混合男子が67.4%

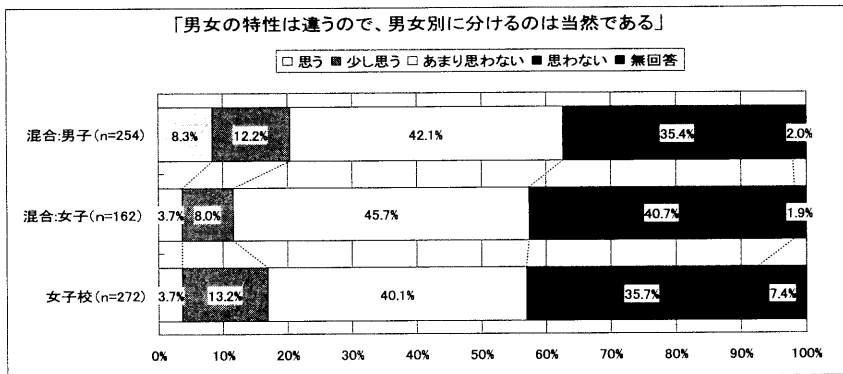
(「思う」45.7%、「少し思う」21.7%)、混合女子が66.7% (「思う」45.7%、「少し思う」21.0%)、女子校が68.1% (「思う」48.2%、「少し思う」19.9%) である。

これらを比較してみると、女子校で男女別名簿の肯定度が一番高いことが分かるだろう。この女子校の68.1%は、現在(中学)の名簿の満足度(図4)で、満足である(「満足」「少し満足」と回答した66.1%よりも高い。混合男子、特に混合女子の方では考えられない現象だ。とはいえ、混合男子、混合女子、女子校のどの生徒も、半数以上が男女別名簿に抵抗を感じていないということが分かる。

しかしながら、この結果だけで判断するのは早計である。次の「男子・女子にはそれぞれ特性が違うので、男女に分ける名簿は当然だ」という質問の結果を見ていくこととしよう(図7)。先ほどと同じく回答数は混合男子254人、混合女子162人、女子校272人である。

その結果、「男女を分けることを当然としない」と考える者は、混合男子77.5% (「思わない」35.4%、「あまり思わない」42.1%)、混合女子は86.7% (「思わない」40.7%、「あまり思わない」45.7%)、女子校は75.8% (「思わない」35.7%、「あまり思わない」40.1%) である。実に70%以上が男女別名簿を一般的なものとは考えていないのだ。特に混合女子は86.7%が、「性による違いによって、男女を分けること」にかなりの抵抗感を抱いているようである。

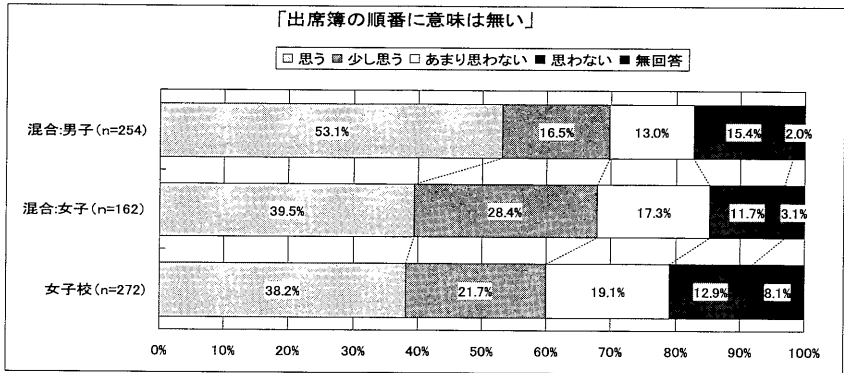
図7 名簿形態別にみた男女別名簿肯定感



また、「出席簿の順番に意味は無いと思うか」という問いの結果をみてみよう(図8)。同じく回答数は、混合男子254人、混合女子162人、女子校272人、である。

「出席簿の順に意味は無いと答えた」のは、混合男子69.6% (「思う」53.1%、「少し思う」16.5%)、混合女子は67.9% (「思う」39.5%、「すこし思う」28.4%) 女子校は

図8 名簿形態別にみた出席簿順意識

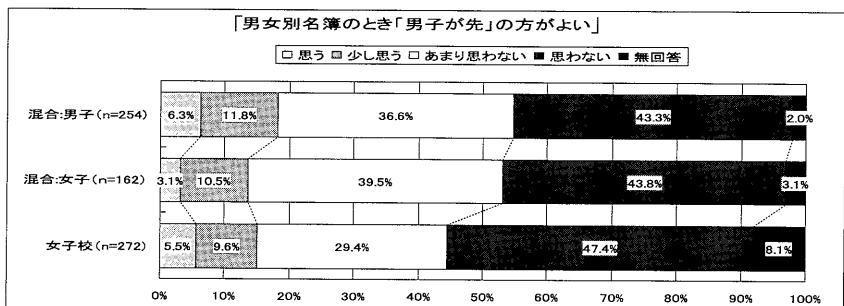


59.9%（「思う」38.2%。「少し思う」21.7%）である。

前提条件として「男子が先」ということを提示していないが、男女別名簿という「男子が先、女子が後」という概念が対象者側にあったと推測できる。「男女別名簿は差別ではないから、自分達が先に呼ばれることは最良ではない」ということだろうか、混合名簿男子の回答が最も出席簿の順番に意味が無いことを肯定している。つまり混合名簿男子の「思う」の回答が53.1%と、混合女子・女子校の「思う」回答に比べ約15%以上も高くなっているのだ。混合女子・女子校の生徒はそれに疑問を持ち「男子が先」であることに無意識的な反感を表明している可能性もあるだろう。

さらに、「男女別名簿は、男子が先・女子が後がよいと思うか」という質問の結果では(図9)、混合男子79.9%（「思わない」43.3%、「あまり思わない」36.6%）、混合女子は83.3%（「思わない」43.8%、「あまり思わない」39.5%）、女子校は76.8%（「思わない」47.4%、「あまり思わない」29.4%）と、約80%の割合で「男子が先・女子が後」に疑問

図9 名簿形態別にみた「男子が先」意識



を抱いているのが分かる。しかしその中でも、やはり混合男子の割合が一番低くなっており、「男子が先」を混合女子・女子などよりも支持する姿勢が見られる。

これまでの結果をみると、「男女別名簿は男女差別ではない」という考えを、対象者である中学生たちは持っていることが分かった。しかしながら、男女別名簿の構造に関する質問においては、男女別名簿に抵抗を感じていることが判明した。特に、「男女の特性別に分ける名簿」、「男子が先・女子が後」では、女子対象者（混合女子・女子校）において否定される傾向にあった。

中学生たちは、表面的には男女別名簿を肯定的に受け入れながらも、その構造には疑問を抱いているようだ。

(4) 男女混合名簿について

次に、男女混合名簿についてみていく。まず、男女混合名簿の狙いでもある「男女混合名簿は男女平等か」という質問の結果である。回答数は混合男子254人、混合女子162人、女子校272人、である。

図10 名簿形態別にみた混合名簿＝平等感

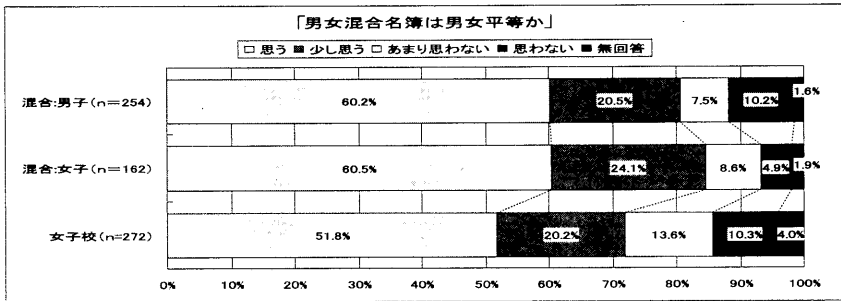


図10をみると、混合男子の「男女混合名簿を男女平等である」と感じている割合は、80.7%（「思う」60.2%、「少し思う」20.5%）、混合女子は84.6%（「思う」60.5%、「少し思う」24.1%）、女子校が72%（「思う」51.8%、「少し思う」20.2%）である。

混合男子と混合女子の間には、4ポイントの差がある。わずかではあるが、混合女子のほうが「男女平等」に敏感なのかもしれない。それと比べると、単一名簿の女子校とは10ポイント以上もの差が見て取れる。混合名簿を取り入れている学校の生徒たちの方が、男女平等だと考える傾向が強い。女子校対象者は、男女混合名簿は男女平等であると考えながらも、男女別学である女子校において、男女混合名簿を男女平等と認めることは、自らの環境が男女平等ではないということを肯定することになると、無意識的に

判断したのではないだろうか。

いずれにしても、どの対象も70%以上が「男女混合名簿は男女平等である」と回答していることから、混合名簿の狙いである「混合名簿は男女平等である」という意識が生徒に浸透しているといえるだろう。

では次に、「前後の番号が異性だけである場合の混合名簿は嫌だと思うか」の結果をみていく。学校という環境において出席簿順にグループを作り、作業することは珍しいケースではない。そのときに、自分以外のグループのメンバーが異性であることに抵抗があるのかを尋ねた。回答数は混合男子254人、混合女子162人、女子校272人、である。

図11 名簿形態別にみた混合名簿への異和感

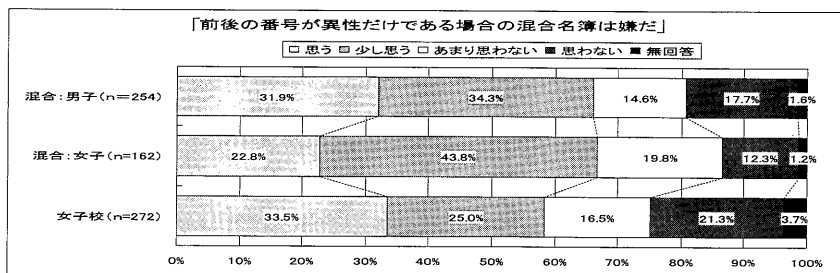
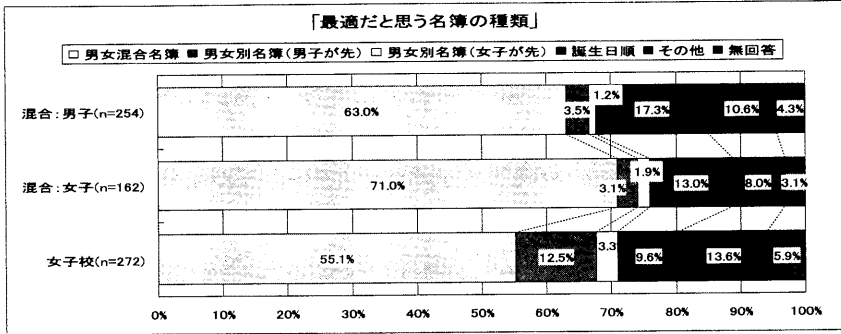


図11にみるように、「前後の番号が異性だけである場合の混合名簿は嫌だ」と考えている混合男子は66.2%（「思う」31.9%、「少し思う」34.3%）、混合女子は66.6%（「思う」22.8%、「少し思う」43.8%）、女子校が58.5%（「思う」33.5%、「少し思う」25.0%）である。ここで一番注目したいのが、混合女子が「異性の中に一人」という状態を最も否定しているところだ。これまで、混合女子は男女平等の傾向を出しつつきてきたが、この質問に対しては敬遠したい状況であることが窺える。これは、女子特有の同調行動と関係があるのだろうか。だが、そうなると女子校の数値が一番低いということから、身近に男子がいる環境における女子特有の行動であると判断できるのではないだろうか。

最後に、「最適だと思う名簿は何か」という質問を設けた。この設問においても回答数は混合男子254人、混合女子162人、女子校272人、である。

図12に示したように、混合女子が71.0%と高い比率で男女混合名簿を肯定しているのが分かるだろう。次に混合男子（63.0%）、女子校（55.1%）の順となっており、混合名簿を取り入れている学校の生徒たちの方が、混合名簿を最適と考えている。いずれにしても、全生徒が半数以上の割合で男女混合名簿を最適であると判断している。「男女別名簿は差別とは思わないけれど、男女混合名簿は一応男女平等だと思うから」という理

図12 名簿形態別にみた混合名簿支持率



由が推測できる。

男女別名簿を最適とする回答を見ると、混合男子は「男子が先」3.5%、「女子が先」1.2%、混合女子では「男子が先」3.1%、「女子が先」1.9%、女子校は「男子が先」12.5%、「女子が先」3.3%と、どの層をみても「男子が先・女子が後」の数値が「女子が先・男子が後」より上回っていることが分かる。「男女別名簿は、男子が先・女子が後がよいと思うか」の結果では、「男子が先」抵抗を示しているのに、これはどういったことなのだろうか。やはり男女別名簿といえば、「男子が先」という意識が定着しているのであろう。

また「誕生日順」による出席簿が、混合男子・混合女子では「男女混合名簿」に次いで割合が高くなっていることが分かる（混合男子17.3%、混合女子13.0%、女子校9.6%）。これは、もしかしたら、混合名簿も50音順で有利不利があるが、生まれ順なら「文句」はあるまい、という考え方の表明かもしれない。

(5) 中学生のジェンダー意識

これまでの、男女別名簿や男女混合名簿に関する結果を見てきたが、ここからは名簿に限定せずに、中学生がどのようにジェンダーを捉えているかを、チェックしていく（図13）。回答数は混合男子254人、混合女子162人、女子校272人、である。

①混合女子は「体力面では男子に敵わない」と感じている

比較的男女平等意識が高い混合女子だが、このジェンダー意識では「男子の方がスポーツに優れている」の肯定度が、混合男子、女子校よりも10%近く高くなっている（混合男子：56.3%、混合女子66.0%、女子校56.6%）。一方「野球部やサッカー部は男子の部

活」では、混合男子51.6%、混合女子41%、女子校48.2%となっていることから、混合女子は野球やサッカーといった種目を男子のスポーツである、と捉えていないことが分かる。つまり混合女子は、具体的なスポーツにおいては男女別にする必要性を感じていないようだが、その根底に「体力では男子に劣る」と考えていることが判断できる。

②女性は「家事」と「母性」を求められている

「理科・数学や男子に向いている」（混合男子18.1%、混合女子22・8%、女子校25.7%）、や「国語・音楽は女子に向いている」（混合男子20.6%、混合女子24.1%、女子校20.6%）の回答を見ると、程度の差はあれ、理系—男子、女子—文系という意識は薄れているようだ。また「生徒会長は男子がやるべき」といった設問でも、混合男子18.9%、混合女子12.3%、女子校7.0%という結果にみるように、混合男子でやや高い傾向にあるが、全体的には「男子が長をするべき」という意識は廃れる傾向にある。

だが、「料理・裁縫は女子の方が得意だ」（混合男子58.3%、混合女子41.0%、女子校50.0%）や、いわゆる「お母さん」的な役割を求められているマネージャーなどでは、女子が向いている（混合男子57.1%、混合女子58.6%、女子校58.5%）という割合が半数近くを占めていることから、家事・育児といった役割を女性に期待する率が高くなっていることが分かるだろう。

また「女性教師は母のようであってほしい」（混合男子9.4%、混合女子11.7%、女子校24.6%）、と「男性教師は父のようであってほしい」（混合男子9.4%、混合女子8.0%、女子校14.0%）という回答を比較すると、わずかではあるが女性の教員に「母親像」を求める意識が高い。これも女性には「家事」と「母性」を期待するための結果といえるのではないだろうか。

とくに女子校対象者においては、「母」意識を重要視する傾向にある。それは「女性教師は母のようであってほしい」（混合男子9.4%、混合女子11.7%、女子校24.6%）、「家事の手伝いをよくする」（混合男子37.0%、混合女子43.2%、女子校51.5%）、「幼児の母親は家にいる方がよい」（混合男子57.5%、混合女子51.9%、女子校62.9%）などの回答で、女子校の肯定度が混合男子・混合女子よりも高いことから判断できる。

③混合男子は性別役割分担意識が強い

「男は度胸、女は愛嬌」（混合男子28.3%、混合女子20.4%、女子校23.2%）、や「男性は労働、女性は家庭」（混合男子24.4%、混合女子13.0%、女子校18.8%）、などの回答を見ると、混合男子は女子校・混合女子よりも男女性別役割分担意識が強いようだ。ただ、どちらも全体の20%強程度の比率でしかないため、一概にそうだとは言い切れない。

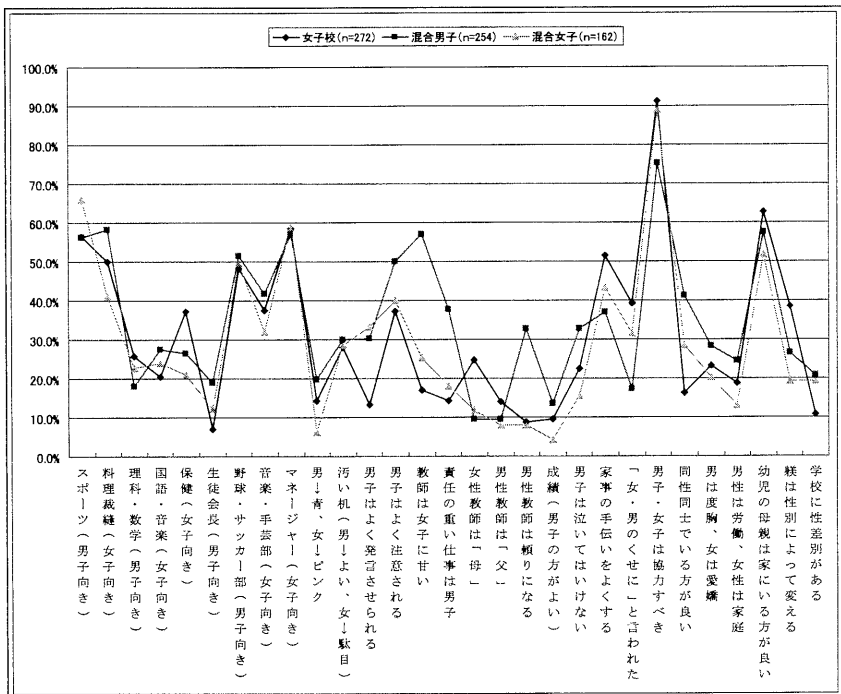
だが「男子・女子は協力すべきである」（混合男子75.2%、混合女子88.9%、女子校

91.2%) の賛成の割合を見ると、混合男子は最も比率の高い女子校よりも20%近くも低くなっている。加えて「男子は男子、女子は女子というように同性同士で固まっているほうがよい」という回答では、混合男子41.3%、混合女子28.4%、女子校16.2%となっているとおり、混合男子の割合が最も高くなっている。これらから、混合男子は「男女は別であるべき」という意識を有する傾向にあることが分かる。混合名簿を取り入れている男子たちのジェンダー意識には、さらなる分析が必要のようである。

④混合男子は「自らが優位に立っている」と感じている

「責任の重い仕事は男子に任せられる」（混合男子37.8%、混合女子17.9%、女子校14.3%）、「男子の方が成績がよい」（混合男子13.4%、混合女子4.3%、女子校9.6%）などから判断すると、混合男子はごく弱い傾向ながらも「男子の方が能力的に優れており、責任の重い仕事をしている」と感じているようだ。また「男性教師は頼りになる」の回答も（混合男子32.7%、混合女子8.0%、女子校8.8%）、混合女子・女子校では一割にも満たないのに、混合男子は3割近くもそう考えていることが、これを表しているといえるだろう。

図13 名簿形態別にみた中学校のジェンダー意識



⑤授業における「扱いの違い」を感じている

「授業中、教師は男子によく発言させる」（混合男子30.3%、混合女子33.3%、女子校13.2%）、「授業中、教師は男子によく注意をする」（混合男子50%、混合女子40.1%、女子校37.1%）、の回答をみると、男子のほうが教師の関心を得ており、授業中に教師が行う典型的な「隠れたカリキュラム」が存在することが窺える。

女子校の結果は、現時点では教室活動に男子が参加していないために、3年以上前の小学校時代を思い出すというあやふやな記憶に頼っており、信憑性が薄い可能性もある。だが「男子によく注意する」で3割近くのもので「そう思う」と回答したことから、教師が男子を注意することは、学校生活において容易に回顧することができる極めて日常的な行動であった、という証明になるのではないだろうか。

(6) ジェンダー意識別にみた傾向

「男女混合名簿は男女平等」「体育や身体測定などのときは、男女別で並ぶので、男女混合名簿は覚えにくく、面倒くさい」「出席番号順でグループに分けられるとき、自分以外全員が異性だったら、男女混合名簿は嫌だ」「男女混合名簿の方が男女別名簿より好き」「男女別名簿は男女差別ではない」「男子・女子にはそれぞれ特性が違うので、男女に分ける名簿は当然だ」「男女別名簿は『男子が先、女子は後』が良い」という男女混合名簿・男女別名簿の設問に対する回答を点数化し、男女平等意識の高いHighグループ（22点から27点）、Middleグループ（18点から21点）、Lowグループ（0から17点）に分け、ジェンダー意識得点別に名簿別クロス集計を行った。

表2は、現在（中学時）の名簿満足度を尋ねたものである。点数が高いほど、名簿に対する満足度は高い。

表2 ジェンダー意識別にみた現在の名簿満足度

	混合男子	混合女子	女子校
High (22~27)	3.25	3.690476	2.904762
Middle (18~21)	3.352941	3.48	3.078431
Low (0~17)	2.873563	3.311111	2.514019

※濃いアミは最大値、薄いアミはその次の値

この表2を見ると、混合女子のHighグループ（以下H）は3.690476で最も名簿の満足度が高いことが分かる。次点は混合女子のMiddleグループ（以下M）3.48である。混合女子の結果を見るとH→M→Low（以下L）3.311111の順に、名簿満足度が低くなっていくということが見てとれる。つまり、混合女子に限って言えば、混合名簿に満足して

いる者は、男女平等意識が高いということが証明される。

しかしながら、混合男子、女子校はそのような結果にはなっていない。混合男子はM (3.352941) → H (3.25) → L (2.873563) という順になっており、女子校もM (3.078431) → H (2.904762) → L (2.514019) と同様な事態になっていることが分かる。しかし、どの層もHとMとは接近しており、LはM群の値を引き離している。L群ほどの対象においても、名簿満足度が低くなるということは、明らかな傾向である。

また、混合女子のL (3.311111) は混合男子のH (3.25)、女子校のM (3.078431) よりも、名簿満足度が高くなっていることから、混合女子は男女混合名簿にかなり満足していることが窺える。

次に「出席簿の順番に意味はない」の回答を見ていきたい(表3)。これは、点数が高いほど出席の順に意味はないと考えている、ということになる。

表3 「出席簿の順番に意味はない」

	混合男子	混合女子	女子校
High (22~27)	2.770833	2.809524	2.619048
Middle (18~21)	3.168067	3.226667	2.990196
Low (0~17)	3	2.75	2.448598

表3を見ると混合女子のM (3.226667) が最も出席番号の順に意味がないと考えていることが分かる。そして混合男子、女子校の回答においても、M (混合男子3.168067、女子高2.990196) がその傾向にあることが判断できる。そしてどの対象においても、M → H → Lの順にその度数が減少してきているのである。つまり、男女平等意識の低いLが、出席簿の順に何がしかの意味を見出していることが窺えるのだ。

では、先程の意識において、混合男子と混合女子・女子校で、最も差異のあった「授業中、教師は女子に甘い」という回答をみてみよう(表4)。これは点数が低くなるほど、教師は女子に甘いと感じていることになる。

表4 「授業中、先生は女子に甘い」

	混合男子	混合女子	女子校
High (22~27)	2.4375	3.02381	3.079365
Middle (18~21)	2.336134	3.04	3.27451
Low (0~17)	2.045977	2.933333	2.841121

表4を見ると混合男子の数値が、混合女子・女子校のM・H・Lのどのデータよりも

低いことが分かるだろう。その中でも、最も低いのはL (2.045977) である。つまり、男女平等意識が低い混合男子が、教師は女子に対して甘い態度をとっていると思う傾向にあるのだ。

次に「男子・女子はお互いに協力するべきである」についての回答をみてみると(表5)、これは点数が高くなるほど、協力するべきであるという結果になっている。

表5 「男子・女子はお互いに協力すべきだ」

	混合男子	混合女子	女子校
High (22～27)	3.166667	3.488889	3.603175
Middle (18～21)	2.966387	3.213333	3.558824
Low (0～17)	2.988506	3.595238	3.504673

表5を見ると女子校のH (3.603175) は最も協力すべきという意識が高いことが分かる。そして女子校対象者を見るとH (3.603175) →M (3.558824) →L (3.504673) の順になっており、男女平等度が低くなるにつれ、男子・女子は協力しなくてもよいという考えをもっているようだ。また、混合女子の場合はL (3.595238) →H (3.488889) →M (3.213333) という順であり、混合男子はH (3.166667) →L (2.988506) →M (2.966387) になっている。つまり、「男子・女子はお互いに協力するべきである」という設問においてはHH・M・Lで分けられる法則性は必ずしも見られないということだ。

全体的に表を見ると、値の低さから、混合男子が最も「男子・女子はお互いに協力すべきである」とは考えていないことが判断できる。

次に、「男子は男子、女子は女子というように同性同士で固まっているほうがよい」を見る(表6)。これは点数が低くなるほど、同性同士がいることに好感を覚えることを意味する。

表6 「男子は男子、女子は女子というように同性で固まっているほうがよい」

	混合男子	混合女子	女子校
High (22～27)	3.145833	2.97619	3.555556
Middle (18～21)	2.588235	2.905405	3.294118
Low (0～17)	2.229885	2.613636	2.943925

今回の質問紙調査において、混合女子は極めて男女平等的な視点を有していることが判明している。だが、先程の「前後の番号が異性だけである場合の混合名簿は嫌だ」と

の設問には、男女別の思想の存在が明らかとなった。この「男子は男子、女子は女子というように同性同士で固まっているほうがよい」という設問においても、同様のことが言える。

表6にみるように、混合女子のH (2.976619)、M (2.905405)、L (2.613636)は、その最小値こそ混合男子のM (2.588235)、L (2.229885)よりも高くなっているが、最大値が3を超えることもない。そのため、混合女子は「同性同士が固まっていることに好感を覚える」ようであるといえるだろう。また、データをみていくと、女子校がH (3.555556)、M (3.294118)、L (2.943925)となっており、女子が固まって行動を取らざるを得ない女子校では、あまり同性同士で徒党を組むことをよしとしない傾向にある。

加えて、「男子は男子、女子は女子というように同性同士で固まっているほうがよい」の結果は、どの対象においてもH→M→Lの順に数値が減少していくため、男女平等意識を持つものほど、「同性同士が固まっていなくても構わない」という意識を持っているようだ。

では最後に、「学校の中に男女差別があるか」という結果をみていこう(表7)。これは数値が高いほど、「学校の中に男女差別はない」と意識があるということである。

表7 「学校の中に男女差別がある」

	混合男子	混合女子	女子校
High (22~27)	3.416667	3.463415	3.466667
Middle (18~21)	3.268908	3.39726	3.346535
Low (0~17)	3.229885	3.340909	3.271028

この結果は、混合男子のH (3.416667)、M (3.268908)、L (3.229885)、混合女子のH (3.463415)、M (3.39726)、L (3.340909)、女子校がH (3.466667)、M (3.346535)、L (3.271028)となっている。どの対象もH→M→Lの順に数値が低くなっていることが分かるだろう。つまり、この結果から、「男女平等意識が高い者ほど、学校の中に差別はない」と感じている傾向にあることが判断できる。

3. 考察

今回の研究では、男女混合名簿が中学生にどのような影響を与えているか、ということ調査した。男女混合名簿の男子・女子、そして女子校の対象者は、それぞれの回答に特徴を持つが、必ずしも「男女平等意識が高いほど、男女混合名簿を肯定する」といった画一的な傾向は存在しないことが分かった。だがどの結果も、男女混合名簿が対象

者に悪影響を与えていないことを示している。それどころか、男女別名簿に構造上の不満を持つ子どもたちにとっては、男女混合名簿の方が理想的で捉えているのである。

ここに、東京都の「ジェンダーフリー思想に基づく男女混合名簿の禁止」の決定は、男女平等社会を大きく妨げるものであることが証明されたということを、指摘したいと思う。

※（注、参考文献、質問紙は省略した）

（2006年 卒業）